

『落ち着いて仕事をしなさい』（二テサ 3:6～13）

7～9 節で著者はパウロの例を模範として取り上げます。パウロはテサロニケで活動した時、使徒が信徒から生活を支えてもらうのは当然の権利としながらも、天幕造りをして生活を支え、教会の人たちに負担をかけませんでした。10 節の「働きたくない者」は原文では「働こうとしない者」です。古代世界では労働は奴隷に任せられ、自由人、特に知識人は労働を高く評価しませんでした。プラトンは労働を卑しいものとして退け、アリストテレスは労働をもっぱら奴隷のためのものと規定しました。これに対し旧約聖書やユダヤ教においては、律法の規定に反していない限り、仕事は尊重されました。ユダヤ教の教師ラビも、聖書研究の方が質的により尊いとしていましたが、職業を習得していました。創 2:15 の「耕し」の語は「労働する」という意味をもちます。アダムはエデンの園で働き、それを通して神さまに仕えました。新約聖書においても仕事は尊重されています。パウロは天幕造りあるいは革細工によって生計をたてることを誇りにしていました。「働こうとしない者は、食べてはならない」という言葉は、パウロのどの手紙にも記されていませんし、当時の格言の引用でもないと思われます。この言葉は旧約聖書やユダヤ教の労働観を初代教会が継承した信徒教育的教訓であったと思われる、またこの言葉の背景には、働こうとしない者は共同体の重荷となりその生活を脅かし、また宣教活動の妨げになっていたことがあると思われます。しかし、この言葉を文脈から切り離して、普遍化しキリスト教倫理の原則とすることには慎重でなければならないと思います。この言葉にあるのは強者の論理と言うべきものではないでしょうか。私たちの周りには働きたくても様々な理由によって働くことができない人々があります。そのような人々に対してこの言葉から何を語るができるのでしょうか。

12 節の「落ち着いて仕事をしなさい」とは、「すぐに終末が来るぞ」と騒ぎ立てている信徒に対して、日々まともに働いて、静かに日常生活を送ろうではないか、と呼びかけているのです。ところで、「自分で得たパンを食べるように、落ち着いて仕事をしなさい」という言葉から、私たちは自分のものではないパンを食べる人々、あるいは社会的経済的な仕組みのことを考えるべきなのかもしれません。私たちの社会においても、労働を搾取され、やる気を奪われ、いくら働いても正当なパンを与えられない人々があり、一方では他者が得るべきパンまで不当に得ている人がいます。それは落ち着いて仕事をするのではないと思うのです。この世界に生きるすべての人は、すべての人々とパンを分かち合いながら、共に働くことへと招かれているのです。